

「〇枚シナリオ」2月14日」

篠田（17）..先輩。料理部部长

千原（16）..後輩。料理部員

料理部の篠田は後輩の千原に誘われ、家についていくと、チョコではなく煮干しを差し出された。困惑している篠田は千原に商店街に連れ出され、そこで煮干しの真実を見ることがなる。

○高校・教室（夕）

「2月14日」と黒板に書かれている日付。

○同・下足箱（夕）

千原「先輩、放課後空いてますか？ 差し上げたいものがあるんです。」

篠田「ん？ ああ、いいけど。この場でじゃないの？」

千原「ちよっち手間がかかっちゃうんです。まずは私の家においでください」

○千原の家（団地）・リビング（夕）

ちやぶ台を囲む2人。

篠田「……あの、これは？」

千原「ハッピーバレンタインということで、煮干しです」

篠田のもとに差し出される、煮干しラーメン。

篠田「ということじゃありませんけど」

千原「いいえ先輩、バレンタインにチョコを食べるべきという思い込みは販売戦略のカモです。思うつぼです。低能です！」

篠田「そこまで言うことなくない!?」

千原「今日に限って世のオトコオンナは頭には血がのぼって浮かれすぎです。やるならば、胃袋にがつんと等身大の愛をぶつけるべきです」

篠田「てか、えらい本格的だな。前から煮干し好きなのは知ってたけど、ラーメンも作っちゃうなんて」

篠田、箸を取り食べ始める。

千原「先輩には是非とも、煮干し料理の海の美味しさをしてもらいたかったです。やっとお披露目できて、とても自慰的な喜びに震え上がっています」

篠田「あんま自慰的とか言うもんじゃないよ。

(麺をすすって)……うん、確かに旨い。こってりとしていながら、優しい味だ。ほんとに千原ひとりで作ったの？」

千原「煮干しの前だけでは、朝飯前なんですよ。他はさっぱりですが」

完飲されたラーメン。

篠田「そんなに煮干しに愛着があるワケは何なんだ？」

千原「理由としては……わかりません。ただ、私の使命は煮干し料理を広めること。そのため生まれたのだと思います」

篠田「熱でもあるのか？」

千原「失礼です！ 未成年飲酒と調理法は遵守してますので。この煮干しラーメンを前にしてまだ分からないのですか？ キレちゃいました。表、出ますか」

千原、強引に篠田の手を引っ張り外へ連れ出す。

篠田「えっどこへ！？」

○商店街（夕）

夕方の賑わいを見せる商店街。

千原、篠田の手を引っ張り煮干しについて説いている。

篠田「どこまで行くんだ？ てかさっきから

何がしたいんだ！ 急に煮干しラーメン

なんか作っちゃったりして……」

千原「人類が見ようとしてもしない煮干しの真実について知ってもらいます！ 場合によっては、今日の日が過ぎるまで付き合ってもらおうことになります」

篠田「今日が過ぎるまでって、なんて授業熱心なんだ。それより明日の数学の小テストの勉強しなきゃなんだけど……」

千原「どんな教科よりも前に、まずは煮干しについて知っておかないと大学には行けませんよ」

篠田「五教科七科目に匹敵するのかよ、煮干しって」

千原「煮干しは基本的にかたくチイワシを釜

揚げしたものが通常ですが、他のイワシやアジとかサバを原料にしたものもあるんです」

篠田「へえ、どれでもいけるんだな」

千原「どれでもいい、ではなく、どれにもチャンスはあるのです。私は人間社会もこうであるべきだと思います」

篠田「もしかして、煮干しの概要を通して人間への説教を始めてる？」

千原「どんな底辺の雑魚でもいい出汁は取れるんです。悪くないでしょう」

篠田「どんな人間にもいいところがある、と説くには底辺なんて物言いはいささか乱暴じゃないか？」

千原「ふーんそうですね。あ、つきました。」

篠田「微塵も興味なしかよ」

○商店街・路地裏（夕）

陽も当たらず薄暗い路地裏に来た二人。
千原「ここに、見てほしいものがあるんです」

そこには得体の知れない黒い球体が浮いてある。よく見ると煮干しが密集し、もぞもぞとうごめいている。

篠田「な、なにこれ!？」

千原「煮干したちの世間へのうらみが形となつたものです」

篠田「煮干しの怨念ってなんなんだよ!」

そのとき、球体から煮干しの触手が飛び出し、中へと取り込まれる。

篠田「うわっ! え!？」

千原「おめでとうございます。先輩はこれから、世界の真実を知ってもらいます」
引きずり込まれる篠田の視界から、千原の姿が遠ざかっていく。

○球体の中

暗い銀色の空間のなかに浮かんでいる篠田。

篠田「なんだ、ここは……」

煮干し「聞こえますか」

篠田「え？」

篠田の目の前には篠田よりも一回り大きい煮干し一匹が浮いている。

篠田「煮干しが喋ってる……」

煮干し「この世の真実から、無知なるあなたへ、語りかけています」

篠田「千原もあなたも真実真実って、さっきから胡散臭いんですけど。というか誰ですか？」

煮干し「2月14日はたしかにヴァレンタインの日です。しかし同じくらい煮干しがスポットライトを浴びる特別な日だということを認識すべきなのです」

篠田「はあ。煮干しの日ってものが、そんなに大事なんですか？」

煮干し「我々のようなメジャーでない食べ物には、その存在に感謝されることなど滅多にないのです。チョコレートさんだって、年に一度の主役を演じることができるとめ、この日を大事してなさっているので

す。なぜ煮干しが注目されてはいけ
ないのでしょか。いや注目すべきです」

篠田「要は、日付はなんでもいいから我々を
ほめろと、そう言いたいのか」

煮干し「なんでもいいではありません！ 2

月14日こそ、時季においても語呂にお
いても適当な煮干しの日なんです！」

篠田「欲張りな……」

煮干し「ちなみに2月29日は何の日にあた
りますか」

篠田「え？ ……うるう年の日？」

煮干し「ニンニクの日だ！ 話を聞け！ 万
死！」

すると、突如として煮干しの大群が現れ、
篠田に向かって押し寄せてくる。

篠田「ええー！？」

煮干しの大群に巻き込まれ、目の前が真
っ暗になる篠田。

○商店街・路地裏（夜）

仰向けで目覚める篠田。上には星空があった。

篠田の顔を覗き込む千原

千原「煮干しのこと、知っていただけかもしれませんか」

篠田「結局よくわからなかったが……真実つてのは結局なんだったんだ？」

千原「何気もなく過ぎていく日々に、記念日がもたらす彩りです。なんでもない日に、色々なしかし一日のうちにスポットライトが当たるのはひとつ。かつてから2月14日はチョコレートと煮干しの双極が互いに我々の日であると争っていました」

篠田「もう意味わかんないから帰っていい？」

千原「そうですね、今日はもう十分でしょう。

また来る日にお会いしましょう」

千原、どこかへ立ち去る。

篠田「なんか今日の千原、変だったな……千

原どころか、すべてがめっちゃくちゃだよ」

○学校・下足室（朝）

千原「え？　昨日は風邪で学校行ってませんよ、何ですか煮干しラーメンって」

篠田「……は？」

千原「もーわたしに会いたいからって生霊でも見てたんじゃないですか？　昔の特撮に、電気で体と精神が分離して、精神が残酷なことをしでかす話があるんですけど、それ思い出しちゃいました。本当になんなんですかね？　それより先輩、これ！　渡しそびれたやつです」

千原、チョコを篠原に渡す。

きよとんとする篠原。

篠田「煮干しじゃないんだ」

千原「は？　熱うつつちゃいましたか？」

篠原Σ「もしかするとあれは、バレンタインデーを憎んだ煮干しの怨霊だったのかも
しれない」